九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

源氏物語における「色好み」について : いろごのみ、すきの再検討

徳満, 澄雄

https://doi.org/10.15017/12280

出版情報：語文研究. 17, pp.13-25, 1964-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

源氏物語における「色好み」について

いろごのみ、すきの再検討

徳満澄雄

源氏物語が好色物語であるか否かについては、古来さまざまの観点から論じられているところであるが、戦後、この物語の「色好み」をどのように受けとめるかという問題について、顕著な対立をみせるものに、折口信夫博士と、吉沢義則博士との所説がある。即ち、折口博士は古代信仰の民俗学的な研究を基礎にして、「源氏はあれだけの六貴族であるから、この古代以来、六貴族の間に崇められて来た色好みの道を完成しようと、一生かけて勤めたのも、当然だと言ふ気がする。そして作者達がそれを崇むべき生活として、一つの人生の規範を示したのも理由のある事である。」(1)と述べられ、光源氏の「色好み」を作者は理想として描いていると説かれるのである。これに対して、吉沢博士は、「すき」の語義論に立って、「紫式部は、男女関係を『こひ』即ち男女の思慕的交情と、『すき』即ち男女の遊戯的交情とに分けて観察しており」(2)「式部は徹底した絶対的精神愛を無二宝珠として、意中に捧持していた、と私は、固く信ずるものである。」(3)と力説され、また「すき」を、本質的なもの即ち肉体的交渉を持たない男女交際と、堕落したもの即ち肉体的交渉の伴う「すき」があるとして、後者は作者によって否定されていると説かれているのである。(4)この対立は二三の批判者を生みながらも依然として根強く持続しており、今、この物語の主題の展開をたどっていこうとする時、源氏物語の「好色」を如何に解釈するかというこの問題は、看過できない根本的課題の一つであると思う。

物語の中に好色的素材があるということゝ、主題が「好色」であるということは、決して混同して論じることは出来ないし、また、物語の登場人物の好色的言動をもって、直ちに平安時代の一般的風潮が、好色を是認していたかのように類推することは、物語が現実的事実とは本質的に異った、創られた世界であることを考えると、安易になさるべきではないにもかゝわらず、従来の諸説の中には、例えば、多屋頼俊博士が登場人物の意識を部分的に検討することによって、「この時代の人々の男女関係に対する倫理的観念は極めて微弱であった。」(5)と結論されているのに顕著な如く、立論の過程において、性急な点のあったことは否めない事実であったと思う。

源氏物語の世界においては「色好みども」または「すき者ども」は、作者及び登場人物の意識の中においては、あきらかに一般人と異った特殊な人間として区別されている。例えば、作者は薫の成長した様姿の美しさを賞揚するために、「いみじう気色だつ色好みどもになずらふべくもあらず」と叙し、また源氏は北山で紫君を発見した時、「かかればこのすき者どもはかかるありきをのみして、よくさるまじき人も見つくるなりけり。」と思い、夕霧は柏木の憂悶を察して、「すき者は定めて、わが気色取りし事に忍ばぬにやありけむ。」と考え、薫は六君に魅せられた自分の心を反省して、「ましておしなべたるすき者のまねに同じあたりかへすゞ〳〵漕ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚無し小舟めきたるべし。」と恋情を抑制するのである。ここで、馬頭や柏木が「すき者」視されているのは、物語の展開上特殊な事例であるかも知れないが、語の用例から云えば、登場人物や作者の意識の中で「すき者」や「色ごのみ」達は一般人と区別されて概念化していることがわかると思う。そこで、この物語の「好色」について考察する場合、㈠　源氏物語が成立した一条帝の時代において、男女の交情に関して世人の通念と「色好み」達の考え方との間に倫理観の相違はなかったか。若しあったとすれば、どの程度のずれがあったのか。㈡　この物語が准拠した延喜・天暦朝において、それはどうであったか。㈢　この物語の世界においてはそれはどうであったか。の三つの角度から検討してその実態を互々比較対照することによって、㈣　作者紫式部の「好色」についての独自な倫理観はどんなものであったか、または物語の進展に伴ってどのように変化していったかを究明することができれば理想的であろうと考える。しかし実際においては、作者の創作意識の中では、㈠と㈡の実態は互いに混融し、それが㈢の物語の世界に反映しているのであってみれば、㈠と㈡の実態を明らかにする資料の発見でもないかぎり、㈣の作者独自の倫理観を闡明することは極めて困難なことになる。従って「好色」がいかに主題と関連しているかを究明するための、さしあたっての手懸りを得るためには、㈢の物語の世界の「好色」のあり方を検討するより外に仕方はないのである。ところがこの際、物語の素材や構想を丹念に分析したり綜合したりして、好色的事件や言動・様態などが、この物語でいかに取り扱われているかを検討していこうとすると、この物語があまりにも客観的に描かれているため、作者の直接的判断を聞きえず、そこに解釈者の主観がどうしても介入する懼れが生じてくるのである。先述した折口・吉沢両博士の全く対蹠的な所説が出てくる所以である。従って、その前提的作業として、「男女の交情」を具体的には意味している「色好み」「すき」並びにその派生語の用例を全部調査する必要が生じてくるのである。だが、「好色」に関する作者の倫理観がどのようなものであるかを検討しようという場合、語彙の一文中における意味の分類だけですむものではなく、その用例は、作者、または登場人物の心理の中では、文の表面上の意味とはまるで反対のニュアンスを持つ場合があったり、また解釈の仕方によっては、どちらにも判断できる場合や、全く倫理的判断の埒外にあるものもあったりして、その語彙の用例の検討は、いきおい、物語の構想にまで及ぶ、かなり広範な解釈にたゝざるを得ない。しかし出来うるかぎり独断におちいることを警戒しつゝ、作者、または登場人物の倫

理的判断において、肯定的、否定的、判別困難の三つの項目に分類して検討を加えてみようと思う。ここで倫理的判断というのは、感情的・思想的の別にこだわらず、単にいいか、わるいかというほどのかなり広い意味であることをことわっておきたい。索引番号は吉沢義則博士の「源氏物語新釈」によるが、源氏物語大成の索引も同時に使用し、解釈は主として、「新釈」と岩波日本古典文学大系所収の山岸徳平博士校注本を参考にした。

源氏物語には「好色」という漢語はなく、「色好み」という語も「色好む」を入れて、わずかに四例にすぎなく、類義語「いろなり」「いろめかし」「いろめかしげなり」「いろめく」の十九例を加えても、これだけでは作者または登場人物の倫理観を十分に知りうることはできない。（「色好み」三例については南波浩「『色好み』の歴史社会的意義」の中で既に検討が加えられ、「これらの源氏における『色好み』の用例には、もはや、打ち込んだ理念的なものがうかがわれず、やはり感性的、知覚的なものとして軽く扱われている。」「そこでは感性的な『色好み』はしだいに批判と反省との材となり、けっして手放しに肯定化されてはいない。」と結論が下されているが……。）そこで、「すく」及びその派生語についても調査した。「すく」の語義は伊勢物語六十一段に「これは色好むといふすきもの」という用例があることからみると、「色好み」よりも広義であり、源氏物語の用例中にも詩歌・管絃・舞踊・自然愛好など風流の意味に用いられたものが七例ほどあり、また三宅清氏の指摘によると、新撰字鏡に「偸」の字を加太久(カタクナ)(奈)とも須介利(スケリ)ともよんでいることから、「頑固で偏奇的な傾向の好み」を意味するのであるが、その趣向の対象は異性に向けられている場合が、この物語の中では圧倒的に多いので、「好色」の意味に解したのである。なお、吉沢博士が、「源語釈泉」の中で、「すき」には本質的なもの、即ち肉体的交渉を持たない男女交際と、堕落したもの、即ち、肉体交渉の伴うものとがあるとしておられるのは、語義論としてはどうであろうか。博士は、

（薫）「……よろづに思ひ給へわびては、心の行く方の薄からぬわざなりければ、すきがましきやうに思さるらむと恥かしけれど、あるまじき心の、かけても侍らばこそめざましからめ、たゞかばかりの程にて、時々思ふ事をも聞えさせ承りなどして、隔てなく宣ひかよはむを、誰かは咎めいづべき。」寄二八四(3)

を引用して、「右は、薫が宇治大姫君の室に入りながら、大姫君の意志を尊重して、実事に及ばずして、清く帰る際に言ひのこした言葉である。」と述べ、文中の「すきがまし」という言葉と「咎めいづべき」という言葉とを読みとることによって、先ず、「すき」理解の入門に備えようと意図され、そこから上述の結論を導き出されているのであるが、この文は薫と宇治大姫君との場面のものではなく、大君亡き後、匂宮の妻として二条院に引きとられた中君に対して、薫は恋情がつのり、侍女の立ちあいの下で、御簾ごしに、大君を偲びつゝ話をする場面のことであるから、博士が、その説の発想の基礎となっている薫と大君との清純な恋と、この中君との場面とを混同されることによって、「すきがまし」に特別な意味を付与されている事実は明白である。また、かりにこの文を本文通りに、薫

と中君とのことゝして読んでみても、中君は長居をしつゞける薫に対して迷惑を感じているのであって、そういう中君の態度がわかるからこそ、薫はこのような弁解をせねばならなかったのである。中君にとってみれば、薫と話すこと自体が「すきがましき」ことであって、人目をはばからねばならなかったのである。しかし薫は「『あるまじき心』のない、精神的な交際なら人が咎めるはずはない。」と、独自な見解から、中君の世間的な倫理観に対して自分の態度を弁明しているのである。ここには、「男女が話をする」という行為そのものに対する両者の見解の相違があるだけであって、「すきずきし」の語義に、精神的なるもの、肉体的なるものの相違はないはずである。勿論、博士はこの説を純粋な語義論として提出されているわけではないが、薫のこのような精神主義的恋愛を「すき」と云えるものかどうか、博士自身「薫と大姫君との関係は『すき』（男女の遊戯的交渉）では無いから、ここに例として引くのは穏当で無いけれども」とことわっていられるのである。

さて、「すく」及びその派生語「すき」「すきありく」「すきがまし」「すきがましかり」「すきごころ」「すきごころ」「すきごころども」「すきごと」「すきごとども」「すきずきし」「すきずきしかり」「すきずきしさ」「すきたわむ」「すきばむ」「すきもの」「すきものども」「すきわざ」「すきゐる」は総数百二十五例である。

「色好み」の用例は次の四例である。

末摘花二三二(7)　左衛門の乳母とて六弐の尼のさしつぎにおぼいたるむすめ、六輔の命婦とて、うちにさぶらふ、王家統流の兵部の大輔なるがむすめなりけり。いといたう色好める若人にてぞありけるを、君も召使ひなどし給ふ。

これは六輔の命婦について、その素性や性格を叙述した条であるが、この文からだけでは、作者の「色好み」に対する直接的な倫理的判断は窺い得ない。従ってこの用例は判別困難の項に分類したが、六輔の命婦自身は、末二三六(10)において、源氏が彼女を「あまり色めいたり」と思って、折々、言葉をかけるのを「恥かし」と思っているので、命婦の倫理観においては、「色めいたる態度」は否定されていると判断して、「色めく」の用例で、これを否定的用例の項に分類した。

若菜下五四(11)　斯く世のたとひにいひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかずらひたる女、かやうなる事をいひ集めたるにも、遂による方ありてこそあめれ、怪しく浮きても過ぐしつる有様かな、げに宣ひつるやうに、人より異なる宿世もありける身ながら、人の忍びがたくあかぬことにする物思ひ離れぬ身にてややみなむとすらむ、あぢきなくもあるかな。

この文章は、女三宮の六条院への降嫁が実現し、源氏が宮の方へ泊るようになった夜、紫上が自己の運命を、昔物語の女性達と比較して悲嘆にくれる条であるが、ここでは、「色好み」は「あだなる人」や「二心ある人」と同列にみなされているところから、紫上の倫理観において明らかに否定されていると思う。そして特に、この紫上の悲嘆は六条院の悲劇の発端であることから、構想上極めて重

婁な点であることに注目すべきであろう。

横笛一七六(1)　御薗の生ひいづるに食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、しづくもよよと食ひぬらし給へば、「いとねぢけたる色好みかな。」とて、

うき節も忘れずながら呉竹のこは捨てがたき物にぞありける

と、ゐて放ちて宜ひかくれど、うち笑ひて、何とも思ひたらず、いとそゝかしう這ひおり騒ぎ給ふ。

この用例は、薫が無心に筍に喰いついて遊んでいる姿をみて、源氏が戯れに言った言葉であるが、ここの源氏の心理は、柏木密通事件の結果を、彼がどのように受けとめているかという点で、かなり複雑微妙なものがある。源氏は幼い薫の目もとに、すでに一癖あるのを見て取って、「女宮物し給ふめりつるあたりに、かかる人生ひいでて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし。」といって、薫の将来に不安を感じるのであるが、眼前の薫は生え出したばかりの歯で、涎をたらしながら無心に筍に喰いついている。そのあどけない姿を見て、「六変ひねくれた色好みだなあ。」と苦笑するのであるが、この冗談めかした源氏の言葉の背奥には、柏木密通事件の苦渋と、その結果として、生れて来た薫に対する憐愍の情と、その将来に対する危惧の念とが、複雑に交錯していたであろうことは、「うき節も忘れずながら呉竹のこは捨てがたき物にぞありける」とうたいかけた和歌の意味からも容易に想像がつく。従って、この場合、源氏の心理において、「色好み」という言葉は、否定的ニュアンスを持つものとして解釈するのが適当であると思う。

宿木二三三(8)　(薫)出で給ふままに、おりて花のなかにまじり給へるさまも、殊更に艶だち色めきてももてなし給はねど、怪しう、只打見るに、なまめかしげにて、いみじう気色だつ色ごのみどもになずらふべくもあらず、おのづからをかしうぞ見え給ひける。

これは薫の様姿の美しさを「いみじう気色だつ色ごのみども」と対比させて賞揚した文章である。ここで「色ごのみども」というのは単なる風流人の意かもしれないが、そうでない「好色者」の意にもとれるところだが、薫のしめやかで、なよやかな姿が、華美を競う「色好みども」よりも重視されている所に、作者の「色好みども」に対する嫌悪をかぎとることができよう。

以上色好みの用例について、私の検討の要領を示して来たのであるが、以下「男女の交情を好む」ことを具体的には意味する語彙及びその派生語についてすべて検討した結果を表に示すと次のようになる。

(1)　表中、例えば「いろごのみ」の否定的用例の欄に、**菜下五四**(11)(**紫上**)とあるのは、若菜下巻の五十四頁十一行目にある語は、文章の前後関係から、紫上が否定的な態度で「いろごのみ」に対していると認められるということである。

(2)　「すく」及びその派生語の中には、明らかに風流韻事を内容として、男女関係とは無縁の意味を持つ例もあるが、例えば、明石入道に関する用例の如く、解釈上、そのいずれとも決定し難いものもあるので、ここでは便宜的にすべての用例をあげて、後ほど本文中で説明を加えることとした。

語彙	否定的用例	判別困難な用例	肯定的用例	計
いろごのみ（三例） いろごのみども（一例）	菜下五四(11)（紫上） 横一一七六(1)（源氏） 寄二三三(8)（作者）	末二三二(7)（作者）		4
いろなり	総一五六(9)（大君）	総一四二(10)（作者）		2
いろめかし	眞二一八(7)（弘徽殿女御）	浮二二二(12)（作者） 寄二二七(14)（作者） 早二一四(1)（作者） 袴一一九(11)（作者） 葵三一七(11)（作者） 三五九(5)（作者）	賀二八〇(6)（源氏）	8
いろめかしげなり		総一三九(11)（薫）		1
いろめく	未二三六(10)（六輔命婦） 菜下九九(9)（鬚黒六将） 紅三八一(9)（眞木柱） 浮一四二(9)（薫） 手二七六(6)（作者）	賀二八〇(11)（作者） 賀二九七(14)（作者）	竹三九二(2)（宰相君）	8
このみ	賀二九九(3)（作者）			1
このみごころ			賀二九八(14)（頭中将）	1
すき	明八六(4)（源氏） 薄二六六(5)（源氏）		横一一九〇(3)（夕霧） 蜻二二五(14)（薫）	4
御すき	横一八一(1)（世人）※		横一八一(1)（御息所）※	2
すきありく		顔一六五(2)（作者）		1
すきがまし	帚三四(6)（作者） 帚七八(10)（源氏）		薄二六二(12)（源氏）	

	紫二二〇(3)（源氏） 葵三二五(3)（源氏） 総一六六(13)（帝・后）※ 寄二一八四(3)（薫）		8
すきがましかり	手二六六(2)（中将）		1
すきごこち	帚五一(1)（馬頭）		1
すきごころ（一〇例） すきごころども（一例）	帚一八〇(7)(4)（源氏） 澪一四三五(10)（源氏） 横一七八(3)（夕霧） 霧二六四(8)（夕霧）	帚八三(4)（作者） 顔一二六(6)（作者） 橋一八五(3)(14)（作者）	賀二九八(8)（帝・女房）
すきごと（七例） すきごとども（三例）	帚三三(2)（作者） 霧二七九(13)（世人・鬼神）※ 匂三六〇(11)（薫） 椎一四五二(9)(7)（八宮）（薫）※	葵三五八(10)（作者） 常七三(5)（源氏） 蜻二二〇(13)（作者）	霧二七九(13)（作者）※ 浮一四一(7)(13)（薫）※
すきずきし	帚四二(2)（馬頭） 帚五〇(8)（馬頭） 帚七五(10)（紀伊守） 紫一八二(9)（源氏） 紫二二〇六(6)（源氏） 末二二四一(4)（源氏） 賀二九五(6)（帝） 明八〇(10)（明石入道） 明九一(2)（明石入道） 関一〇八(5)（源氏） 絵二〇一(8)（源氏） 薄二六一(12)（源氏） 玉三三九(5)（源氏） 胡三〇(3)（作者） 螢四八(7)（螢兵部卿宮） 螢五一(3)（螢兵部卿宮）	顔一六五(3)（女房達） 賢四二〇(13)（作者）※ 蓬一六一(5)（末摘花の叔母） 菜上三八五(11)（作者）	賢四二〇(13)（源氏・朱雀院）
	40	10	11

すきずきし	真二一六(4)（髭黒大将） 梅二一四(7)源氏 梅二一四(5)源氏 裏二二五(8)源氏 菜上二八六七(12)（朱雀院） 横一九〇(10)夕霧 霧二二〇(14)夕霧 霧二二六(7)夕霧 紅三七九(3)按察大納言 橋一五(6)薫 橋二二〇(3)薫 橋二一四九(8)夕霧 総一二六(1)薫 寄二六(5)薫 東一二(4)蜻蛉 靖二二〇七(13)薫 手二六九(12)中将 手三〇九(11)薫	すきずきしかり	紫二一九(12)（源氏）	
すきずきしさ	帚三三(9)（作者） 帚六(1)馬頭 須四一〇(13)世人 横一八〇(9)夕霧 ※	すきばむ	靖二一二(2)（薫）	
すきもの（九例） すきものども（七例）	菜上二八七(14)（朱雀院） 総一二一(6)（薫）			菜上二九二(12)（作者）
	帚三八(6)（作者） 顔一二四(9)夕顔 紫一二九三(2)作者 末二三七(1)源氏 葵三三五(5)源氏 賢三八(5)作者 松二二七(6)源氏 菜下一一〇五(12)（作者） 菜下一一〇九(11)（夕霧）			
	紫一七九(7)（源氏） 玉三八九(11)（源氏） 玉三九六(3)（源氏） 竹三九三(6)（薫）		須四一(13)（五節） 竹三八八(5)（女房達） ※	
16		1	6	2

すく	帚 六三(10)（頭中将） 明 八〇(11)（石入道） 玉 三六(10)（玉鬘乳母） 眞 二一(9)（源氏） 包 三五八(14)（世人） 紅 三七八(11)（紅梅六納言） （邸の人々※） 椎 五一(4)（八宮） 椎 七八(8)（世人） 総 一三六(13)（中宮）	紫 一七四(3)（源氏供者） 須 四〇(7)（作者） 澪 一三三(8)（作者） 玉 三六三(2)（作者） 胡 二三(6)（作者） 橋 三四(3)（薫） 椎 七四(3)（宇治姫君） 総 九九(8)（薫） 総 一三九(1)（薫）	手二六七(5)（作者）	顔 一一四(14)（惟光） 賀 二九五(14)（女房達） 胡 二九(2)（源氏） 螢 四六(8)（源氏） 紅 三七四九(13)（源氏） 梅 六(11)（紅梅六臣）※ 竹 三九一(12)（女房達）	
ざれば みすく	帚 五九(7)（馬頭）				
すきわざ	葵 三二四(9)（帝）				
すきゐる		明 七五(14)（作者）※		明 七五(14)（源氏）※	
合計	八十六例	四十六例		二十六例	
	158	2	1	1	26

註 (イ) 括弧内は倫理的判断の主体者である。

(ロ) ※印のあるものは、例えば 霧二七九(13)「さるさまのすき事をし給ふとも、人のもどくべきさまもし給はず、鬼神も罪許しつべく、あざやかに、物清げに若う盛りに匂ひを散らし給へり。」とある条で、「すき事」は、元来、世人が非難し、鬼神も罪とすることであるが、作者は、夕霧の美しい様姿に免じて、特にここで許容している場合であると解釈して、世人や鬼神の立場にたつと否定、作者の立場に立つと肯定とせざるを得ないような用例を示す。

この表を概観すると、肯定的用例が二十六例に過ぎないのに対して、否定的用例は八十六例の多数にのぼっていることがわかる。そして、否定的用例の場合は、「色好み」または「すき」は、弁解、訓戒・反省、抑制、非難、否定、嫌忌、隠蔽、卑下、嘆息、不信等の対象となり、「あはあはしく」・「あだあだしく」・「はかなく」・「恥づかしく」・「頼もしげなく」・「許し得ず」・「もてわづらふ」べきこととして、積極的に否定されているのに対して、肯定的用例の場合は、風流韻事を意味する場合や、惟光・五節・一部の女房達のように「色好み」と呼ばれている人々の肯定であったり、からかい半分の興味であったり、まこ薫のように特に道心堅固な人物が自己の偏頗な心を反省して「すき」に関心を抱いている場合や、一定の条件の下に許容されている場合であって、さほど積極的には肯定されていないのである。また、否定的用例は、物語の構想の重要な点において見いだされるのに対して、肯定的用例は短篇小説的な巻に多く見いだされる。またこの表をもっと詳しく読みとるために、

〔一〕、作者は登場人物の「好色」について、地の文でどのように述べているか。

〔二〕、その登場人物は「好色」について、どのような意識を抱いているか。

(イ) 登場人物は自己の「好色」について、どのように思っているか。

(ロ) 登場人物は他者のそれについて、どのように思っているか。

(ハ) 登場人物は一般的に「好色」に対してどのような意識を抱いているか。

〔三〕、他の登場人物は、その登場人物の好色的行為や態度について、どのように思っているか。

〔一〕の作者が地の文において「好色」に対して、直接的に批判している例は極めて少い。その大部分が、菜上三八五(11)「わりなき心地の慰めに、猫をまねきよせて、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげに打ち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしや。」といった類で、このような例から、作者の倫理観を判断することは出来ない。ただ、帚三四(6)において、頭中将を「すきがましき、あだびとなり。」と評したり、賀二九九(3)において、源内侍のすきずきしき態度を、「うたての好みや」と苦笑したり、眞二一八(7)において、近江君の「色めかしうさまよう心」を父母が「もてわづらひ」「遂にあは〳〵しき事」が生じるであろうと危惧したりしている条に、わずかに作者の否定的態度を窺い知ることができるのであるが、以上の登場人物達は、極端な性情の人物として描かれているのであるから、作者が一般的に「好色」をどう思っているかを、この用例から云々することは妥当ではなかろう。また、寄二三三(8)の様姿美を「いみじう気色だつ色好みども」と比較できないくらいに立派だと叙している例や、「色めかしげ」でない所を人物の長所として挙げている例は、螢四八(7)(螢兵部卿宮)袴一七一(11)(鬚黒大将)匂三六〇(11)(薫大将)にあるが、一方、作者は夕霧の成長した美しい姿について、「さるさまのすき事をし給ふとも、人のもどくべきさまもし給はず、……霧二七九(13)」と叙して、夕霧の美貌に免じて、「すき事」を許容し

ているのであるから、ここからも、作者の倫理観を積極的に判断することはできない。総じて〔一〕の用例からは、作者の思想を直接的に聞くことはできないと云うべきであろう。しかし、六条院の生活において、源氏が玉鬘を恋愛遊戯の玩具にして、「すき者」達の心を誘惑しようとする態度を、作者は、紫上に批判させた上、自身も、「誠のわが姫君をば、かくしももて騒ぎ給はじ。うたてある御心なり。」と辛辣に非難しているような方法で、「好色」を否定している例が少くないことを忘れてはなるまい。

次に〔二〕と〔三〕の登場人物についてであるが、ここでは紙幅の都合上、源氏についてどのようになっているかを述べるだけにとどめたい。源氏の性格は、帚木冒頭において、「まめだち」て「目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは、好ましからぬ御本性」でありながら、あいにく稀には、「心づくしなる事を御心におぼしとどむる癖」があって「さるまじき御振舞」があったと叙されていて、この文章からすると、源氏は基本的には「まめ人」であるが、時々「さるまじき」行為のある人物として描かれていると思う。しかし、この性格は、物語が発展するにつれて、「好色的人物」から、「好色の批判者」へと成長していくのであるが、源氏は自分では当初から「すきずきしき」行為を否定しているのである。即ち、源氏は空蟬・紫君・末摘花・六条御息所に云いよる時は、相手の女性または仲介者に、自己の行為が好色的に見えることをはばかり、しきりに、決して好色的な気持から云い寄るのではないと弁解する。（帚七八(10)帚八〇(4)紫一八二(9)紫二〇六(1)末二四一(4)澪一三五(7)関一八〇(5)）そして、紫君を誘拐することが、世人に好色めいてみられはせぬかと心配し、（紫二一九(12)紫二二〇(3)）明石君を初めて訪問する時には、好色めいたふるまいだと後めたさを感じ、（明八六(4)）また、玉三九三(5)では、好色心を抱くまいと自制したり、葵三二五(3)澪一四二(10)薄二六一(12)梅二四〇(8)の四ヶ所では、自己の好色的行為を深く反省している。即ち「過ぎにしかた、殊に思ひなやむべき事もなくて侍りぬべかりし世の中にも、なほ心から、すきずきしき事につけて物思ひの絶えずも侍りけるかな。さるまじき事どもの心苦しきが、あまた侍りしなかに、遂に心も解けずむすぼほれてやみぬる事二つなむ侍る。（薄二六一(12)）」と、源氏は秋好中宮に向って、彼女の母六条御息所と、藤壺への恋を反省し、また梅二四〇(8)においては、須磨謫居の原因を、「すきずきしき咎を負」うたからだと、夕霧に向って告白し反省しているのである。しかし、源氏にとって、やはり「すき心」は抑制し難いものではあった。その為、我が子夕霧の教育に対しては、かえって厳格なものがあって、梅二四〇(5)において源氏は夕霧に向って、浮名を流すことは後生の障りになるとして、「すきずきしき心」を決して使ってはならないと、くどくと訓戒している。こうした源氏の態度は、夕霧が落葉宮に恋をした時も一貫して続いており、この用例から源氏が「好色」を理性的には否定していることがわかるのである。

一方、源氏が「好色」に肯定的態度をとっている例を見てみると、先述した紫君発見の条（紫一七九(7)）、末摘花邸の物かげに立っている男を源氏が「誰れならむ。心かけたる好色者（すきもの）ありけり」と思った条（末二三七(1)）、また、源氏が兵部卿宮の「色めかしう、なよび給へる」姿を、女性の立場で見たらさぞ興味深かろうと思う条（賀二八〇）

(6)、祭の日、源氏に場所をゆずった女に対して、「いかなるすきものならむ」と関心を抱く条(葵三三五(5))の四例が、所謂長篇小説的構想のはじめの巻々にあるが、他はあとでのべる三例を除いてすべて、六条院の生活の中で源氏が恋愛遊戯にふけっている短篇的巻々の用例である。(玉三八九(11) 玉三九八(3) 胡二九(2) 螢四六(8) 螢四九(13) 常七三(5))これら後者の用例は、源氏が玉鬘を恋の囮に使って、「すき者ども」が自分の邸に出入りするのを面白がっているところであり、ここの源氏の態度はかなり遊戯的で軽い気持のものであるから、この興味や関心をもって、ただちに倫理的肯定の態度だと云いうるかどうかは疑問に思うが、一応、広い意味で、肯定的用例の中に入れておいた。こうした源氏の恋愛遊戯に対して、紫上は「あやしの人の親や、まづ人の心励まさん事をおぼすよ。けしからず。玉三九八(3)」と厳しく批判していることを付記しておく。なお、薄二六二(12)は、源氏が六条院に里帰りした秋好中宮に対して、「かやうなるすきがましき方は、しづめがたうのみ侍るを…」と云って、恋情をほのめかす条の用例であるが、この直前の薄二六一(12)では、源氏は秋好に向って、自己の半生をふりかえって、「なほ心から、すきずきしき事につけて物思ひの絶えずも侍りけるかな。」と云って、六条御息所と藤壺との恋を反省しているのであるから、文面通りに、この例を肯定の例にいれるのはどうかと思われるところである。また、明七五(14)「すきゐる」と賢四二〇(13)「すきずきし」の用例は共に風流韻事のことであるから説明を省略する。

次に〔三〕の源氏の好色的言動を他者がどのように見ているかという項であるが、桐壺帝は源氏が六条御息所に恋していることを訓戒して、「心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり。」葵三二四(9)と述べられ、また紫君を隠し育てゝいるのを聞かれて、「すきずきしき」行為だという意味で訓戒されている。

しかし、源氏があまり「まめだつ」と、好色な女房達や供者の惟光にとっては、やはり不満なのであって、源氏に「すき心」が不足しているのを物足りなく思っているのである。(顔一一四(14) 賀二九五(14) 賀二九八(8))

以上、源氏物語の世界において、「男女の交情」を意味する語句が、作者及び登場人物の倫理観において、どのようにとらえられているかということについて、概略述べて来たのであるが、否定的用例の方が圧倒的に強く、その例は第一部より第三部まで広く見いだされ、主要人物自身、自己の「好色」を反省し、また上は天皇皇后より下は世人に至るまで否定的態度をとっているということができる。

では何故、好色を否定するのかといえば、残念ながら、その根拠については、この物語はあまり明確な説明をほどこしていない。たゞ、明石中宮が匂宮の好色的態度を訓戒して「なほかく一人おはしまして、世の中にすい給へる御名のやう〳〵聞ゆる、なほいと悪しきことなり。」と云い、源氏が夕霧に対して「なほすきずきしき咎を負ひて、世にはしたなめられき。」と反省している言葉などから、世評を非常に気にしていることだけはわかる。だが、ここをもって、「好色」について、たゞ世間の風評を気にしているだけであって、

深い倫理観はなかったと解するのはどうであろうか。この物語の世界では、世人は一夫多妻の制度について、天皇並びに皇子と、「ただびと」との間に異った考え方をしているのが次の文によってわかる。

「かごとがましげなるも煩はしや。誠は心やすくて暫しはあらむと思ふ世を、思ひの外にもあるかな」など宣へ、ど又二つなくてさるべきものに思ひならひたるただ人の中こそ、かやうなる、事の恨めしさなども、見る人苦しうはあれ。思へばこれはいと難し。遂に斯かるべき御ことなり。宮たちと聞ゆるなかにも、筋殊に世人思ひ聞えたれば、いくたりも得給はむことも、もどきあるまじければ、人もこの御方をいとほしなど思ひたらぬなるべし。かばかり物々しくかしづきする給ひて、心苦しき方おろかならず思したるをぞ、さいはひおはしけると聞ゆる。（宿木二五一）

この文章は、匂宮が夕霧家の六君と結婚する段階にたち至った時、正妻の中君の立場を説明した条であるが、これによると、天皇、皇子以外の「ただびと」の結婚は、やはり一夫一妻があたり前だと考えられていたことがわかり、宮様、特に皇太子となるべき人は、多くの妻妾をたくわえても、人は非難しなかったことが知られるのであるが、そうすると、一夫一妻を原則とする「ただびと」の間で、「好色」が倫理的に批判されるのは当然で、この物語に、否定の根拠があまり説明されていないということは、読者にとって、否定の根拠は自明のことであったから、作者はことさら説明を加える必要がなかったのであろうと思う。ついでに云えば、作者は、はじめ、物語の伝統に立って、源氏の華かな恋愛を描いていたが、次第に「ただびと」の倫理にたちかえって、一夫多妻の源氏の生活に批判のまなこを注いでいったのであろうか。しかし、こういった結論めいたことは、この物語の構想の分析をまたずしては云えないことであるから、この小論の方法の限界に、いまはとどまっているより外に仕方はないのである。

註

（1）折口信夫全集第十四巻二二三
（2）吉沢義則「知」の平安婦人〈紫式部の恋愛観〉一〇三
（3）同右一二三
（4）吉沢義則「源語釈泉」〈すき〉
（5）多屋頼俊「源氏物語の思想」〈貞操観の瞥見〉